〔古典研究〕

「サルのヒト化における労働の関与」を読む（上）

── 内在的弁証法 ──

須藤　泰秀*

表題のエンゲルス草稿の論述形式を読み，研究史上初めて，そこに流れている内在的，歴史的，および総体的な弁証法を開示します。対象に関する諸々の知識を整理し，科学的な論文を作成するこの技法をマスターしようとする人々のためにです。しかし概念運用技術として弁証法を修得するには，悟性によって弁証法を知るこれまでの学習法は全く役に立たないので，修行のイロハに関する冗長な序文を認めておくことにしました。

キーワード：感性的確信　労働　木登り垂直攀縁動作　知覚的認識　直立二足歩行　手の自由　石器製作　悟性的認識　発話　脳　感覚器官

序　文

かつてエンゲルスは弁証法を「概念を運用する芸術[1)]」としてマスターせよと主張していたが，本稿はこの目的を達成するための一契機を提供するものである。しかし今までのところ弁証法の実際的な意味を，具体例に内在するものとして弁証法的に示した解説書は見当たらない。そのためここでは，科学対象に関する諸知識の科学的編集技法を具体的に理解するに適切な論文の一つ，「サルのヒト化における労働の関与」を取り上げ，サルからヒトへの身体進化について，我々科学者（F・エンゲルス）が研究者たちの個々バラバラな諸成果を秩序立てヒトの発生，形成，発展，および消滅の全過程に関する説明を展開するこの手順を追うことにした。かの草稿は確かに，内容的に古いだけでなく明らかな誤りと言える箇所もある。しかし，古典を読むのは事実資料を知るのが眼目ではない。このためには，最新の研究成果を読めば済むはず。論文の歴史的背景だけを知るのであれば，ディレッタント的に史料を漁れば十分事足りる。これに終始するだけで科学と言えるなら，歩けば棒に当たる犬でさえもが至高な博士と言えるのではなかろうか。古典から学び取るのは著者の研究姿勢とか，対象を認識する段取りとか，説明の手順とか，体系性に関してであって，したがってこの草稿からも，やはり必然性を踏まえたヒト化の説明を熟読玩味しなければならないと考えるのである。

これまでに内在的弁証法の展開を歴史的，体系的に著した著書はヘーゲルの業績を除けば，それを唯物論的に継承したマルクスとエンゲルスの諸論文をおいて外にない。ヘーゲルは自己の哲学を科学と呼び換え，マルクスとエンゲル

＊立命館大学産業社会学部教授

スがそのことを支持し科学的方法としてそれに媚を売っていたほどであるから，彼ら二人にとって科学とは科学対象そのものから生成してくる内在的弁証法の展開，総体的な説明以外の何ものでもなかった。それだから，科学的社会主義とは弁証法的社会主義と換称し得る。実際に社会主義は，内容的には剰余価値，形式的には唯物史観，これら二つの発見によってまさしく科学というべきものになった。しかるにその後の弁証法的唯物論の理解は古今東西を見渡しても，とりわけ弁証法を概念運用技術とするにつながる研究は，許萬元氏の哲学分野における画期的な労作『ヘーゲルにおける現実性と概念把握の論理』（大月書店，1970年）や，牧野紀之氏の『生活のなかの哲学』（鶏鳴出版，1975年）における現実的理解などごく僅かな業績を除けば，「そこに在ってそこに無い」というがごとき対立物の同一さえ納得し得ないような悟性的解釈か，外面的解釈に立つか，断片的に矛盾を指摘するくらいのものであった[2)]。哲学専攻に属さない我々が，対象に内在する対立や矛盾を域内超脱することによってより高い次元での総合を徹頭徹尾追究し，科学的に叙述を展開するに役立つような教程は皆無だったと言ってよい。このような指南書の制作はマルクスが念頭に置いた仕事ではあったが，資本に関する論理を展開したとはいえ彼はそれに着手せず他界してしまった。この遺言執行は，重要な「論理学，弁証法，および認識論の同一[3)]」を指摘したが，所々ヘーゲルに対する未消化部分を散見させるレーニンの『哲学ノート』が残されているだけで，準備作業のままに終わってしまっているのである。

これらの事情のゆえに，弁証法を概念運用能力として学び取る現時点での取掛かりには，いまだに特別な困難が伴う。個別的な科学領域での研究がいかに進歩してきたと言っても，全体的連関の中でそれらの諸成果を体系づける事が為されていない以上，科学的方法は今でもそれら諸領域の外部から，すなわち哲学から注入されざるを得ない。そのうえ多くの読者は，弁証法の外面的悟性的解釈を棒暗記させられ，量質転化とか対立物の相互浸透とか否定の否定とか有り難や節をほとんど役立たずのままに暗唱させられ，論語読みの論語知らずで放置され，せっかちに結論を得ようとさせられているからその困難には一入のものがあろう。100年掛けても人類はエンゲルスの方法を理解できなかったのだから，人は修行もせず本稿を読んだだけで容易く内在的弁証法を理解し得るはずがない。それゆえ本稿から問題点を自覚し，自分で能力を高めるよう努力する必要がある。だからここでは，一から十まで答えを教えてもらおうとするようなダメ人間が発する愚問は，近代科学への道を歩き出したガリレオが，投獄されている最中も何かと世話を焼いてくれた『太陽の都』の著者，オカルト主義者カンパネッラの問いに一切答えなかったごとく，無視してしかるべきものであろう。そんな輩は，自分が何のために弁証法を問題にするのか自分で分かっていないのだから。自分の頭で考えず助兵衛根性から覗きの標的として弁証法を位置づけるなんて，一体全体何を目的にそれを扱おうとしているのだろうか。酒肴代わりに，チョイと一摘まみしたいのか。しかし，これは全くまずい。消化に悪いから直ぐ止めた方がいいだろう。これでは絶対に，弁証法の「べ」の字も知り得ないと思えるからである。あるいは弁証法を屁理屈の技巧くらいと見做し，誰かの前で細切れの知識を自慢したいのだろうか。知識としての弁証法で済

ませるだけなら，日本講壇哲学における最高水準の業績ヘーゲル著，金子武蔵訳『精神の現象学』（岩波書店）が出版されているから，そこに収められている大量の注などを十二分に堪能すればよいと思う。

やはり，能力としての弁証法を学びたいのなら，読者は最も単純な知識から最も複雑な知識へ自分で登り詰めて行く覚悟を持たなければならないであろう。見当違いに「思想」と訳されているGedanke（観念）は，何しろそれ自体で上向する力を有しているのであるから。その代わりここでは，本稿制作者自身が歩んできた修行の道について二，三，述べておくのが適切であろうかと思う。何と言っても，科学の方法を学習し始める最初には流読を薦める。本稿制作者の体験上，大変参考になった教えを，長きに過ぎるとは考えるが以下に紹介しておきたい。

「ヘーゲル研究の初期においては，いわゆる『小論理学』，つまり『哲学の百科辞典』の第一部『論理学』の流読を軸にする，ということです。……。

ここで説明しなければならないことは，まず『流読』ということですが，これは世界的なドイツ語学者であった関口存男（つぎお）先生の言葉で，要するに，速読の一種です。それは，もちろん，分ろうと思って読むのですが，分らない所にぶつかっても，そこにこだわらないで，ともかく通読することを主眼とする，という読み方です。つまり流れるように読むのです。

もう一つ説明しなければならないことは，その流読を軸にするという時の『軸にする』という言葉の意味です。それは，その流読ばかりをしているのではなくて，まず『小論理学』を一度流読したら，今後はそれから離れて，ヘーゲルのほかの作品を読んでみるとか，研究書を読んでみる，あるいはまた誰かの話をきいてみる，自分の生活経験を考えてみる，そしてしばらくたって，また気が向いたら，再度『小論理学』を流読する，というようにやっていく方法です。これが流読を軸にするということです。

このように『小論理学』の流読を軸にするということは，要するに，ヘーゲル山塊の全貌について自分なりのイメージをもってもらい，かつその中から興味のもてる所を探して，そこを細かくやるという所を見つけるためなのです。

したがって，第二に言いたいことは，その流読で興味をもった所が出たら，その部分について『大論理学』をみてみることを始めとして，ほかの作品を読んでみるという風にして，だんだんと切りこんでいくのです。興味のもてる所が出てこなかったら，それは仕方ありません。自分で興味がないのに，ひとが『ヘーゲルは大切だ』と言うからというだけでヘーゲルを読んでも，何も出てきません。何年かしてまた流読してみて，興味のもてる所が出てくるか，あるいはヘーゲルのもとを去るか，どちらかでしょう。哲学研究で一番大切なことは，この主体性ということであり，自分の気持に忠実であるということです[4)]」。

それにしても，本稿制作者を驚かせたのはかなり年輩の「マルクス主義」ファンでも，自分の知的活動を整理しそれがどのように位置づけられるのか，常識に引っ張られ自覚し得ていないという主体性の欠如であった。人に付いて習うというような意味の学問（Lehre），史料などを漁るような好事家的作業（Entdeckung），素材を詳細に我がものとし，素材のさまざまな発展形式を分析し，それらの発展諸形式の内的紐帯を探り出すような研究（Forschung），そして何等かの対象に関するそれら諸領域で得られた諸々の知識を，これらが示している思考上の意義と限界をつぶさに吟味し，最も単純なも

のから最も複雑なものへ体系化し，精神的に具体的かつ総括的なものへ上向するような科学（Wissenschaft），これらの異同を自覚していない人が多い。本稿に表現されている「我々科学者」とは，能力としての弁証法全体を既にマスターしている者を指す。自分の金字塔は上記のいずれにも属さないと自負しているとすれば，多分それは実務家のマニュアルか三流評論屋の饒舌の類いだろう。訳が分からず自分の仕事を科学だと自惚れるのは勝手だが，かくも優しき寛容さではヘーゲル，マルクス，およびエンゲルスの諸著作の論述形式を読むことは決してできない。

さらに驚くべきことに，マルクスやエンゲルスは御都合主義者，すなわち日和見主義者だというのである。マルクス『資本論』の価値形式に関する部分は弁証法で構成されているが，他の箇所はそんなに厳密に論理を追及していないし，エンゲルスの著作に内在的弁証法を認めることはできないであろうという御託宣を聞いた。しかし商品論の価値形式に弁証法を見ているのなら，それを展開させる価値が必然的なものとして先行的に導出されていなければならないし，その前に使用価値が論理的に発見されていなければならない。マルクス自身がこのことを「第２版への後書き」第２パラグラフで述べている。エンゲルスの場合も『自然の弁証法』で，自然科学にとって弁証法は絶対的な必需品になると強調しておきながら，この一端を占めるかの草稿が，たとえそれが推敲されていないままだったとしても，論理的整合性に欠けていたとは到底考えられない。その証明が本稿なのである。マルクス教を信じて弁証法の大家を疑うより，大家から謙虚に学び宗教を疑った方が生産的だと思える。

ソヴェトという武力の権威に頼り切ったマルクス教だったから，ナチスまがいの「社会主義」諸国が崩壊すると途端に，それまで「マルクス主義」の立場に立っていると公言していた人々の多くが，ペテロのようにその立場を隠さざるを得なくなった。そしてウジウジと反マルクスをつぶやいてきた人々の中に，ここぞとばかり大声で「マルクスの教説」なるものを我流で講釈し，したり顔でこれを揶揄してみせるという奇妙な状況に陥った。両者とも，弁証法を理性的に理解できず悟性に棲みついているという点では同じ穴のムジナだ。ちなみに指摘しておけば，悟性は思考がこの水準にしか到達していない限りそれはブルジョアジーの武器の一つだとされてきている。心あるなら弁証法を悟性的に，すなわち常識的な思考だけで解釈する時代はもう終わりにしよう。弁証法の弁証法的理解に勤しみ，自分の論文に内在的弁証法を駆使することによって，それを分かり易い科学的なレベルに高めようではないか。サラリーマンなども本来的に含む労働者が階級として，生活諸領域全般に亙ってヘゲモニーを掌握する来るべき時代においては，そこでの共生社会建設に理性的思考が不可欠だからだ。レーニンがヘーゲルを読み，弁証法に習熟しようと言ったのも実にこのためであった。真なる在り方を求めての合意形成能力を高めなければ，多数決原理の鬼子たる強大な不満はいつまで経っても減ってゆかない。

弁証法的唯物論の活用能力を鋭くしてゆくためには，マルクスとエンゲルスの諸論文のうち次のものを，列挙した順序で読み進むとよいであろう。最初はマルクス「フォイエルバッハに関するテーゼ」である。これには今までのところ最良の参考論文として，牧野紀之「『フォイ

エルバッハ・テーゼ』の一研究[5)]」を揚げることができる。第二は，マルクス「経済学批判・序言」の第一パラグラフから「したがって，利益社会のこの地層群で人間の利益社会が有する前史は終わるのである」という文章まで。ここから，内在的弁証法の大まかな構成を読み取ることを薦める[6)]。第三に，ここで取り上げた「サルのヒト化における労働の関与」。さらにエンゲルス『空想から科学へ』を読むとよい。これには形式を読むことに注意を払っている牧野紀之「『反デューリング論』を読む[7)]」が比較的参考になろう。そして最後に，マルクス『資本論』現行版，第一部，第一篇「商品と貨幣」が揚げられる。初めの使用価値に対する短い説明からして，弁証法全体の雛型として一体系が円環を閉じているこの「商品論」に関しては，数多の解説書があるがいずれも弁証法的唯物論を理解するには全く参考にならない。むしろ，この目的のためには百害あって一利なし。翻訳もerscheinen als（と思えてしまう）という主観的確信を「現れる」とか，ひどいのになると「現象する」などと訳し，冠詞を無視し，我々科学者を表すwirや，研究者ないし経験者を表すmanを訳出していなかったり，Formを Inhalt（内容）の対概念として「形式」と訳すにもかかわらず，それにGestalt（内容や機能などを合わせ持った形や姿，姿態）への訳語「形態」を当てたり，哲学用語を日常用語で済ませたり等々，とにかく論理形式には無頓着なので，マルクスの原文を見ながらヘーゲル『精神現象学』とヘーゲル論理学をも併せて自分自身で格闘する外は道がない。ヘーゲルの邦訳は，鶏鳴出版から発行されている牧野紀之氏のものを薦める[8)]。科学者の立場からの考察なのか，研究者の立場からの考察なのか等々，叙述の状況設定が明確にされ，何よりも読者自身が自分で考えるよう工夫された訳書だからである。マルクスやエンゲルスの諸論文に関しては全体的に見て，今までのところ本稿を除けばそれらの内在的，歴史的，および体系的な弁証法を指摘したものは皆無なのである。願わくば自分の頭を精一杯使って，近代弁証法の大家たちとのデスマッチに勝利せよ。健闘を祈る。

なおここで，本稿を初学者用に準備し，最初は流読が一番と言っておきながら多くの注番号で訳文を読みにくくし，細々と注を付した事情を簡単に断っておきたい。かつてはこんなことは稀だったが，競争社会の影に脅迫され闇雲に「オリジナリティー」を自己主張するためもあってか，些細な事にも注を付す傾向が強いことによる。しかし本稿は，世界で初めてエンゲルス草稿の科学的方法を開陳すると言っているのであって，これ以上のオリジナリティーなど望むべくもないであろう。それにこれまで我々は「マルクス主義」陣営内でのバトル・ロワイアル，木を見てこれこそが森だというような細かい「オリジナリティー」同士が衝突し合い目糞，鼻糞を笑うがごとき不毛な「論争」の紙屑公害を嫌と言うほど撒き散らされてきた。悟性を武器とした者どもの争いに決着の着け方はなく，折衷的な曖昧さで妥協するか，ミーチン派がスターリンの独裁的暴力に取り縋ってデボーリン派を粛清してもらったように，思考以外の手段を用い反対派の研究者を抹殺し「解決」を謀る以外に道はなかろう。これまでの「論争」なるものを笑い飛ばせば，落語全集より面白い数冊から成る一シリーズが出版され得るだろうこと請け合いだ。

馬鹿馬鹿しいことだが一例として，基礎概念に属する生産様式についての「論争」を挙げて

おく。一方は生産様式とは生産力と生産関係との統一だとする解釈のみが正しいと強弁し，他方は生産諸力の結合様式が生産様式であってこの様式が媒介となり生産関係が発生すると主張し，両者が駄々っ子の睨み合いを続け結論を得ないまま空しく時が過ぎてきている。しかし本稿制作者がかつて指摘しておいたように[9]，マルクスやエンゲルスは老人ヘーゲルにならって統一を媒介とほぼ同じ意味で使用しているので，この争いは同じような内容の異なる用語法の正当性を巡って覇を競ったにすぎず噴飯ものであった。ただし，媒介されたものは同時に無媒介なものでもあると捉えている限り，論理レベルから言えば後者の「媒介」説の方が水準は高い。というわけは，統一という言葉は静止した抽象的同一しか表現していないからである[10]。いかにユニークであろうと，例えばセックス目的に手で贈り物を運んだことがヒトの祖先に二足歩行を促したという「オリジナリティー」溢れるO・ラヴジョイ説に見られるように，それが真理たる全体に繋がっているとは限らない。マァそうは言っても，内在的弁証法を能力としてマスターしようとする熱心な読者が反復的に訓練を積む場合を想定し，これら修行者の後学のために啓蒙的な意義を見出し，沢山の注をつけておくことにしたのである。

しかしながら「何だか分かんなーい」を続発し，初めから細かい注に一々気を取られていたのでは，内在的弁証法を自分の論文作成に活用することはまず無理だと強調しておく。こんな学習法にしか頼ってこなかったから，弁証法の弁証法的理解にはほとんどの者が及ばなかったのであり，知識としての弁証法解釈でさえ多くの学生が途中で挫折したのであった。ヘーゲルが驚くほど何回も，推敲に推敲を重ねた『哲学入門』（武市健人訳，岩波文庫）を手にとって眺めてみよ。論理学に関する部分，第二課程第一篇から第二課程第二篇，第三課程へと次第にスペースが広く取られていってはいるものの，第二課程第一篇でさえ字面を追っても細かく読んでも，初めのうちは何が何だかさっぱり分からず途方に暮れるだけであろう。にもかかわらず，その入門書がこの形式で注も付されず公刊されたのは，何よりもまず朧げながらでも弁証法の全体構成を汲み取らせるためだったとしか考えられない。弁証法的唯物論を概念運用技術としてマスターしてもらうために，牧野紀之氏に賛意を表しつつ再度，本稿に関しても読者には初めのうちは流読を薦めておきたい。

そのうえでしばらくしてから，なにゆえかくかくの構成部分が取り上げられそれらが決められた手順で組み立てられざるを得なかったのか，構成諸部分それぞれの中がどう大別されて諸々のパラグラフが組み入れられ，これらがそこでの順序に従って配列されざるを得なかったのか（だから小見出しが必要），パラグラフ内のいろいろな文章がそのような文脈で述べられざるを得なかったのか，文章各々の中にしかじかの用語が何ゆえに取り入れられそれぞれの順番で並べられざるを得なかったのか，必要な事柄を漏らしていないのか，不必要な事項を盛り込んでいないのか等々，論文の中へ中へ「下向的に」検討してゆかねばならない。そして最後に構成部分，パラグラフ，文章，および用語の各々がいかなる認識カテゴリーあるいは論理的カテゴリーとして位置づけられるのかを考える。以上が，論述形式を読むということの概略なのである。何でそんなに細かいことを言うのかと疑問が出されそうだがこれが，対象の必然性を必然性に基づいて認識し必然的に説明する

科学にとっての武器たる抽象力の発見，内在的弁証法の学習法なのであって，科学にとっては実際に細かい詮索が重要だとはマルクスの主張でもあった。論述内容だけを読んで済ませるとすれば，用語や文章や節などが前後していたとしても大人としての頭脳の持ち主であればそれを理解できるはず。何も好き好んで苦労を背負い込むことはない。しかし一見，苦難に満ちたように思えるあの論文鑑賞法はほとんどが小，中学校での国語で習ったことの応用にしかすぎないのではなかろうか。元来科学論文というものは全体的に緊張感漲るべき性質のものであって，それはちょうど映画『アマデウス』の中で，ディサルリがモーツァルトの傑作に驚嘆しての台詞「あの音が一度でも，否，半度でも違っていたら曲全体が壊れてしまう」というのと全く同じである。だからマルクスは，それらを踏まえ上向的に制作した自分の必然的な作品は一種の芸術だと自信を持っていたのである。

最後に，本稿に関して凡例風の注意を記しておく。

ここで取り扱った「サルのヒト化における労働の関与」にしても，従来の翻訳は全てが，内在的弁証法の展開にはほとんど配慮していなかったと断ぜざるを得ない。例えばドイツ語学の大家，故関口存男氏がドイツ語の核心は冠詞にありとして，冠詞論全三巻の大著を残しているにもかかわらず，これまでの翻訳は個別を表す定冠詞はともかく，質の含みを表わす不定冠詞のニュアンスには注意せずにきた。確かにドイツ人は，日常的に無意識に冠詞を使い分けてはいる。しかしかの科学はその本質を抽象力に持つものであってみれば，特にヘーゲルが実践してみせたように言葉を自覚的に使い分けることこそ肝要。普遍的ニュアンスの不定冠詞に不注意な翻訳は一切が，個別は普遍でもあるという矛盾にさえ無頓着な訳業だったと言わざるを得ない。かようにも明敏な語感では「個別は個別であると同時に普遍でもある」などと，お題目を何十億回唱えてみたとてその有り難さは少しも分からず実用的な科学的思考には程遠い。端緒発見に関することでさえ覚束無いようでは，20世紀に，客観界に脈々と終始一貫流れる内在的弁証法を現実の姿で明示し得た研究が，全く見られなかったのも無理はない。したがってここでは，かのエンゲルス草稿も全体的に改めて訳出せざるを得なかった。本稿では論理展開の一段落毎の認識条件，翻訳〈一区切り毎に原ページを示した〉，次いで論理的整理の順に記述してゆく。エンゲルスがその草稿において，実際に使用した論理的カテゴリーに対応している語句はこれを（　）内に示しておく。読み進めば，内在的弁証法の粗筋を悟性的にではなく，弁証法的に理解することにつながるであろう。そして弛まず修行を積み重ねてゆけば，科学的かつ芸術的な論文作成に巧みになれると考えるのである。

ところでマルクスとエンゲルスは，ヘーゲルの弁証法を継承したとはいうが異なる点もある。唯物論と観念論の立場の違いは言うまでもないが，しかしそれだけではない。ヘーゲルの論理学は，認識論的予備作業とでも評すべき『精神現象学』を前提にしているとはいえ，論理的諸カテゴリーの配列ではその著書との連関性が背後に隠されているかのように思えてしまう。これに対し弁証法的唯物論の創始者の方は，恐らく先に揚げたヘーゲルの入門書の構想に着想を得て論理的諸カテゴリーを，概略的に見て『精神現象学』の文脈をなぞるように配列している。つまり，論理学と弁証法と認識論との同

一が展開されている。それゆえ，ヘーゲル自身の哲学入門は比較的手軽な参考になろう。このことを意識してエンゲルス草稿の大まかな構成を指摘しておくと，第Ⅰ部は対象意識あるいは存在論（ただしこの原語のSeinは，「在り方」と訳した方が分かりやすいので本稿では主にこの用語を使う），第Ⅱ部は自己意識あるいは本質論，および第Ⅲ部は理性あるいは概念論である。

この訳にはEngels, F. (1876) Anteil der Arbeit an der Menschwerdung des Affen. *Marx-Engels Werke. Bd. 20.* Dietz, Berlin, 1958, SS.444-8. を底本として利用した。なお必要であれば，市販の邦訳と対比されたい。念のため指摘しておくと, 大月書店出版の上記邦訳, 全集，第20巻，には原書のページが付されている。

ゴシック体の見出しは認識手順あるいは論理展開を示すため，ヘーゲル哲学を参考に本稿制作者が付加した。この草稿の体系性を理解することにつながると考えたからである。

原文のパラグラフ各々には番号と***ゴシック斜体***の小見出しを制作者が付し，内容理解のために便宜を図った。

なお原文中の*イタリック体*部分は，本訳文では***太字斜体***を以って置き換えた。

そして，注は最後に纏めて掲載することにした。

この序文は本シリーズ全体に通じるものである。

今回は紙数の制約から，対象意識あるいは在り方論に相当する第Ⅰ部だけを掲載する。

Ⅰ　対象意識：客観的対象（ヒト化の在り方）を巡る意識

1　感性的確信

（1）主観的観察

我々科学者はまず任意の科学対象（サルからヒトへの身体進化）を選択し，感性によってこれを無媒介に受け入れ，ここから説明の端緒，対象の全生成過程を説明し始める最も単純な切掛けを発見し，その説明方法を確定しようと考える。

（訳１）***対象と方法***　そもそも富というものは全てこれ，労働こそが源泉だ[1]と古典派経済学者たちは言っている。その労働は，自然が労働に素材を提供しこれを労働が富に変える，その自然とならんで富の源泉ではある[2]。しかし労働はさらに, 限りなくそれ以上のものなのだ。労働はヒト[3]の生活全ての最も基本的な条件であって，それもこの労働がヒトそのものを創造した，と我々が言うに違いない[4]ほどの或る種の意味においてなのである。〈S.444.〉

論理的整理【存在】

ⅰ　端緒発見

①　我々科学者が主観的に取り上げた科学対象（ヒト化）の一瞥した感性的，すなわち客体的，すなわち現実的な全体，という純粋な在り方（人類の営為が対象化されている生活に必需な富）は研究者（古典派経済学者）にとってはそれ以外の反対の極，すなわち研究部門領域内での純粋な無である基本部分（労働）との同一状態，つまり生成状態（源泉）に映っているかのように我々には思えてしまう。

②　しかるに，感性的個別としての基本部分（労働）は，その全体（富）を発生させる

一要素（源泉）であるかのようだ。

③　かくしてこの個別的な基本部分（この労働）こそが，これから対象全体へ進展（ヒトそのものを創造）し得る普遍性（或る種の意味）を有した客観的な定存在だと，我々科学者には思えてしまうのである。

以上の，個別は個別であると同時に普遍でもあるとする類いの思い込みは，感性的確信と呼ばれているものである。

ⅱ　**方　法**

感性的個別〔これ，今，ここ〕（労働）が同時に普遍でもあるとすれば，我々科学者はその個別的なもの（労働）を実在的に定まった端緒として受け入れ，これをタマネギの皮を一枚一枚中へ中へと剥いてゆくように分析し，剥いた順に皮を外へ外へと配列（ヒトニザルからの労働生成史を展開）してゆけば，科学対象の全生成過程を観念の中で総体的に再構成できるだろうと考えるのである。

（2）実　証

ところでこの感性的個別としての基本部分が，感性的確信が思い込んでいるように，本当に普遍性を有しているか否かは客観的に証明されなければならないが，それは実践（研究者の観察）の中で証明する以外に道はない。

（訳2）***ヒトの祖先***　ヒトニザルが[5]恐らく，第三紀と地質学者たちが命名している地質時代のいまだにはっきり確定されていない終わり頃，何十万年か前，熱帯のどこか ── 今は多分インド洋の底に沈んでしまっている或る大陸上 ── に，特殊に高度な進化を遂げた一種が棲んでいた[6]。ダーウィンが我々に，この我々の祖先に関する或る種[7]の略述を与えてくれている。それは全身が深い毛で覆われ，髭を生やし尖った耳を持っていて樹上に棲息し一群[8]を成していたのである[9]。〈id.〉

論理的整理【定存在】

①　**一回目の実証【実在性】** ── 我々科学者によって個別的端緒と思い込まれている対象の運動が，研究者の意識に反映している。

すると感性的個別（ヒトニザル）は確かに，研究者（地質学者）に多くの属性（第三紀 ── 何十万年か前，熱帯のどこか ── 或る大陸上）を意識させもし，対象はそれら諸属性を一纏めにした普遍的な在り方（一種）をも意識させて実在している。

この点で個別＝普遍とした科学者の感性的確信，思い込みは正しかった。しかしここでは，個別を個別として捉えることには失敗してしまっている。

②　**二回目の実証【制限】** ── 研究者（ダーウィン）が個別に固執している。

ところが，個別（この我々の祖先）はあくまで個別だとする研究者の個別に制限した知識も，やはり普遍的な在り方（或る種の略述）をも示している。

だから，個別＝普遍という矛盾したかの事態は少しも変わってはいない。

③　**三回目の実証【変化】** ── 研究者が個別を捉えている瞬間，主客一体の状態を，我々科学者が凝視中の研究者に代わって観察する。

しかし我々科学者が見ても，研究者は個別（それ）を依然，普遍（一群）に変化してもいると捉えたままである。

かくして，この条件設定も問題解決にはならないのである。

ただし考えられ得る条件設定全てのも

と，三回の実証いずれにおいても感性的個別としての基本部分が普遍性を有していることは実証されたわけであるから，科学対象は主観的に取り上げられるが，説明の端緒は客観的に決められているということになる。この端緒は，かの感性的個別が対極への変化に本性から従属しているものとして，質と呼ばれているものなのである。

２　知覚的認識

（１）主観的観察

そこで次に我々科学者は，ここでの端緒も研究者も，個別＝普遍という矛盾状態にあることを知りつつ観察し，個別を個別として捉えようとする。そして，対象に普遍的なもの，不変な何等かの同一を想定している意識は知覚と呼ばれている。

（訳３）***直立二足歩行の発生***　木に登る時，足とは違う仕事を手に振り当てるのがそれらの生活様式[10]であったが，恐らく初めはそれらの生活様式に促されてであろう，これらサルどもは平地を歩くのに手の助けを借りる性癖をなくし始め，直立度の益々高い或る種の歩行を身に付け始めた。この歩行によって，***サルからヒトへ移行するための決定的な一歩が踏み出されたのである***[11]。〈id.〉

論理的整理【一＝多】

① 個別的な対象（かの一群）は確かに一ではあるが，これは研究者に対して必ず多くの属性（木登りの時，足，手）へ，無関心な「もまた」で結ばれているような肯定的展開を示し，この運動結果は同時にそれらの属性が相互に排除し合った一種の単一物（生活様式）に映っているかのように，我々科学者には思えてしまう。

② それゆえ，このような単一物（生活様式）を受け入れる研究者は，この対象は偶然的で相対的な（平地の時，直立度の益々高い）一物（或る種の歩行）だと知覚しているがごときに，我々科学者には思えてしまう。

③ かくして，一（この歩行）が同時に多（サルからヒトへ移行する）であるという一種の矛盾（決定的な一歩）は，我々科学者には対象を受け入れる際に研究者の知覚が犯した錯覚だと思えるのである。

（２）実　証

我々科学者はその矛盾をもっと詳細に考察する。

一回目の経験

我々科学者はまず，かの対象が研究者に反映している，その在るがままの姿を観察する。

（訳４）***サルの移動様式***　現生ヒトニザルは全てが直立することも，また[12]両足だけで前進することも可能。しかしこれは辛うじてしか行われず，しかも極めて不器用。それらの自然な歩き方は半直立姿勢で行われ，また手の使用を伴ってもいる。大部分は拳のナックルパートで地面を支え，そしてちょうど松葉杖にすがって歩く脚の不自由な人のごとく，長い両腕の間に両脚を引き入れ身体を前へ揺すり出しもするように歩行している[13]。総じてサルの間では，四足歩行から二足歩行に至る移行諸段階を全て今でも見て取れる。しかし，二足歩行が緊急策というべき性質を[14]超えているようなサルは，それらの中には一種たりとも生息していないのである[15]。〈S.444-5.〉

論理的整理【反発】

① 一対象（現生ヒトニザル）は，研究者にとっては多くの属性（直立，二足歩行，ナ

ックルウォーキング）から成り立っている。だから対象は唯一の属性しか持っていないわけではない。しかしそれら多くの属性は一対象に属するものとして，相互に一種の同等な（歩行）状態にある。

② それだから，その対象（サル）が有する多くの属性（移行諸段階）はそれぞれ別々に分かれているが，その対象の同一性（移動様式）を示してもいるということになる。

③ この同一性は多くの属性それら自体のいずれでもなく，多くの属性それぞれから抜け出したものであるから，我々科学者の観察は，普遍性を有する或る種の感性的個別（サル）へ戻ってしまっているのである。

二回目の経験：その１

再び認識の円環を巡らなければならないが，一回目の轍を踏まぬため我々科学者は対象が一，多くの属性は研究者の錯覚だと条件設定し，研究者の経験を我々科学者が観察してみる。

（訳５）***手の発生***　我々の毛深い先祖の間でこの直立二足歩行がまず原則的なものとなり，やがて必然的なものとなり得るに至った[16]とすれば[17]，このことはその間に益々手に別の仕事が振り当てられていったということを前提している。サルの間でさえ既に，手足の或る程度の使い分けが広く行われている。手は既に述べたように木に登る時，足とは違った様式で使われる。とりわけ手は食べ物を毟り取ったり[18]握ったりするのに用いられもするが，このことは既にサルより下等な哺乳動物の間でも前肢で行われている。幾種類かのサルは手を使って樹上に巣を設え，それどころかチンパンジーのように風雨を防ぐため枝と枝との間に屋根を作りもする。サルは手で棒を握って敵を防ぎ，あるいは木の実や石を敵に向けて放ったり[19]もする。それらは捕らえられるとヒトを真似，手で若干の或る種の単純な作業を行ったりもする。しかしまさにこの点においてこそヒトに最も近いサルの場合でさえ，その未発達な手と数十万年間の労働[20]によって高度に完成させられたヒトの手との間には，いかに大きな隔たりがあるかが分かる。骨と筋肉，これらの数と全体配列が両者ともいかに一致していようと，最も遅れた未開人の手でさえもがいかなるサルの手にも真似られない数百の作業を行うことができる。いかなるサルにせよその手は，ごく粗雑な石の刃物[21]をさえかつて製作したことがなかったのである[22]。〈S.445.〉

論理的整理【索引】

① 対象（この直立二足歩行）は一であり，研究者の頭脳に反映した多くの属性（緊急策，原則，必然）はたとえ何であろうとも錯覚であるから，それらは一等質物（手足の機能分化）たることを前提している。

② この等質物（手足の機能分化）は，多くの属性（木登り，食料採取，営巣，屋根作り，棒握り，木の実や石の放り投げ）に内在する或る共通性（或る種の単純な手作業）である。

③ だから多くの属性は或る共通性に等しいのだが，しかしこの共通性の次元においても多くの区別（大きな隔たり）が存在している。かくして，相変わらず一＝多という矛盾状態のままなのである。

二回目の経験：その２

前段の研究者の頭脳に反映した多くの属性は一等質物であるから，この段階では研究者が対

象を一と見做している。

（訳６）***手の形成***　我々の祖先は数千年間を通して[23]，サルからヒトへ移行する間に徐々に自分の手をいろいろな作業に適合させることを覚え，それゆえその作業は初めのうちはごく単純なものでしかあり得なかった。最も遅れた未開人，身体的に退化すると同時に，むしろ[24]動物的な状態に後退したと想定せざるを得ないような未開人でさえもが，この過渡的な生物に比べればやはり遥かに進んでいる。ヒトの手が最初の小石を刃物に加工するまでには，我々の知っている史的時代[25]などそれに比べれば，問題にならないかのように思えてしまうほどの長時間が経過していたであろう。しかし，決定的な一歩は踏み出されていた。***手が自由になり***，今や新しい技能を次々獲得することができるようになっていた。そしてこの技能とともに[26]獲得された，以前にも勝る柔軟性を後の世代に継承させ[27]，世代から世代へ強化させていったのである。〈id.〉

論理的整理【索引の措定】

① 対象（我々の祖先の手作業）を一と見做す場合，研究者はそれを多くの属性（いろいろな作業）に分解し，これらを見た目とは全く違った或る種の表現（ごく単純なもの）に還元する。

② その或る種の表現という在り方は，多くの属性と呼ばれていたものが自由な諸素因（長時間の経過）と表象され，初めて意識によって背負われることになる。かくして物は，それが一である代わりに，諸々の素因から成る一共通性（手の自由）に還元される。

③ だからこの共通性自体が一であるだけでなく，それはまた多くの素因（柔軟性の強化）でもある。

三回目の経験

かくして，対象が一と多の二重性を本質としている。

（訳７）***手の発達***　だから手というものは労働のための器官であるだけでなく，それはまた労働の産物でもある。労働することによって，新しい作業に次から次へ適合[28]することによって，こうして獲得した筋肉や靭帯の特殊な鍛練が，いやもっと長期には骨にも及ぶ特殊な鍛練が継承されることによって，そしてこの継承で受け継がれた器用さが一層複雑な新しい作業に絶えず新たに応用されることによって初めて，あたかも魔法を使うかのようにヒトの手は，ラファエロの絵画やトルヴァルセンの彫刻やパガニーニの音楽を生み出せるほど高い完成域に到達していったのである。〈S.445-6.〉

（訳８）***ヒト化の二重性***　しかし手は，単独で存在するもの[29]ではなかった。それは一全体を成す最高に複雑な生物有機体の一肢節[30]にしかすぎなかった。そして手にとって役立ったことは，手がその労働によって奉仕してきた全身にとってもまた役立った。――それも二重の様式においてである。〈S.446.〉

（訳９）***動物的進化の度外視***　第一の側面は，ダーウィンがいう成長の相関法則の結果である[31]。この法則によると生物有機体の部分一つひとつが有する或る形は常に，一見それとは何の連関もないかのように思えてしまう他の部分が持つ或る形と結び付いているという。だから，細胞核の無い赤血球を持ち，後頭部が二つの関節（関節丘）で第一脊椎と結合している動物は全てが，例外なしに幼獣に哺乳するための乳腺を持っている。そういうふうにして，哺

乳動物で割れた蹄を持っているものは，決まって反芻のための複数の胃と結び付いている。我々にはその連関を説明することはできないが，或る形が変化すると他の身体部分の形が変化する。青い目をした真っ白なネコは必ず，あるいは大概耳が聞こえない。ヒトの手が次第に器用になってゆき，これに伴って直立二足歩行に適した脚が鍛練されてくると，そういう相関作用によって身体の他の部分にも反作用が起こったことは疑いない。しかし，この作用は今までのところあまりにも研究されていないので，我々はここではそういう作用の存在を事実として漠然と認める以上のことはできないのである[32]。〈id.〉

（訳10）***発話の発生と形成***　そんな第一の側面よりずっと重要なのは，手の発達が身体の他の部分に及ぼした直接的で証明可能な反作用だ。既に触れたように，サルに似た我々の先祖は群居性動物であった。動物全ての中で最も群居性の強いヒトの直接の先祖を，非群居性動物に求めることは明らかに不可能。一方で手の鍛練とともに，つまり労働とともに始まった対自然支配は，新しい進歩一つひとつがなされるたびにヒトの視界を広げていった。ヒトは自然という対象の新しい，それまで知られていなかったいろいろな属性を絶え間なく発見していった。他方で労働のトレーニングは，そのおかげで相互協力や協同作業を行う機会が頻繁になり，この協働が個体各々にとって有益であることをはっきり意識させたので，必然的にいわゆる利益社会的成員を[33]互いに一層緊密に結び付けることに貢献した。要するに生成しつつあったヒトは，***互いに何かを話し合わねばならない***ところまでやってきた。欲求はそのための器官を作り出した。そしてサルの未発達な咽頭は，絶えず音調を一つひとつ向上させることによってゆっくりと，だが着実に形成されてゆき，口の諸器官は分節一字一句のようなもの[34]の発音を次第に覚えていったのである。〈S.446-7.〉

論理的整理【対自存在】

① その共通性を持ったもの（手）は，他者に対して関係している在り方（労働のための器官）しか示していないわけではない。それは同時に何等かの独自なものとしての在り方（労働の産物）をも示していて，この側面が高い共通性（完成域）に移行する。

② そこで，その共通なもの（手）の矛盾（二重の様式）が異なった側面，他者に対して関係している在り方たる対他存在（動物的進化）と，独自なものとしての在り方たる対自存在（手の鍛練）とに割り当てられ，対他存在の側面が度外視される。

③ しかし，抽象化された対自存在そのもの（手の鍛練）にも，いわゆる区別なるもの（対自然知識の拡大，協働の生成）が帰属する。しかしこれら区別はいずれも，対他存在の側面との区別を本質的に特徴づけさせるような単純な規定性，自己の絶対的な区別――感性に条件づけられていない普遍（発話の発生と形成）を独自に持っているのである。

3　悟性的認識

（1）無条件的普遍

しかしこの無条件的普遍は，感性に条件づけられた対他存在から自己内に回帰している。この単純な規定性を明らかにすることは，いまだに研究者の課題である。

研究者が観察中なので，我々科学者が研究者に代わって自己内に回帰しているものを明らか

にする。我々科学者は，かの無条件的普遍にいまだ付着している感性的な残滓を徹底的に度外視する。このように，超感性的な世界を対象として真理を発見しようとする意識は悟性と呼ばれている。

(訳11) ***発話の労働起源説の正しさ*** 労働の中から発話が[35]，また労働とともに発生したとする説が唯一正しい説明であることは，動物との比較によって証明される。最も高度な進化を遂げた動物でも，動物には互いに伝え合わねばならないようなことは僅かしかない。だから，分節言語がなくてもそれを伝え合うことができる。野生のままの状態ではいかなる動物でも，話したりヒトの言葉を理解したりすることができない，ということを欠点などというものに感じたりはしない。ところが，ヒトに飼い馴らされると事情が一変する。イヌやウマはヒトと接触しているうちに分節言語をよく聞き分けられるようになり，それらの表象の及ぶ範囲内では言葉をいずれもたやすく理解するようになった。動物はさらにヒトへの愛着，あるいは感謝の情などのような以前は知らなかった能力をも獲得した。そして，こうした動物とたびたび接触したことのある人なら誰しもが，それらの動物は自分が話に不適格だということを***今では***欠点のごとくに感じる場合が少なくない，という確信を恐らく抑え難いことであろう。もっとも残念なことに，それらの発声器官はあまりにも特定の方向に特殊な進化を遂げてしまっているので，今さらこの欠点を直すわけにはいかないのである。しかしその器官が備わっているところでは，或る限界内でこの話せないという状態も変わってくる。鳥の口腔器官はヒトのそれと大変異なっているのは確実だが，それでも鳥は話すことを覚える唯一の動物。そして最も嫌な鳴き声を持つ鳥，オウムが一番よく話す。オウムには自分の話していることが分かっていない，などとは言うことなかれ。オウムはもちろん，話したりヒトの相手をしたりするそのこと自体が楽しいので，何時間でも知っている限りの単語を繰り返し喋るのだろう。しかしオウムは，それの表象の及ぶ範囲内で自分の話すことが分かるようになる。人がオウムにその意味の見当がつくように悪口を教え（これは，熱帯諸国からの戻り船における乗組員たちの一番の楽しみ），その後でオウムを怒らせると，人は直ちにオウムがベルリンの野菜売り女と同じくらい正確に，その悪口の使い方を心得ているということが分かるだろう。美味しいものをねだる時も同様なのである。〈S.447.〉

論理的整理【力】

① だから人がかの共通なものから対他存在を度外視してみると，そこにまだ残っているものは無条件的普遍（労働から発生した発話）だけである。しかし我々科学者にとっては，その無条件的普遍（発話）は一方で，多くの対他存在（飼育動物の分節言語理解，諸々の感情）が有している普遍的な媒質であり，他方で，それら対他存在各々の特色がことごとく抹消され感性的性状を無くした何等かの対自存在（訓養）だけで，後者が前者へ外化（以前は知らなかった能力をも獲得）する。

② この因果性を我々科学者が形式で捉え直せば，前者が物の独自性の喪失（結果としての発話），あるいは受動性，すなわち何等かの他者に対する一種類の在り方（発話の可能性）であり，後者が対自存在で能動性（ヒトによる発話調教）である。しかし，これら二契機は相互に移行し合っている。

③　かくして，この運動結果は力と呼ばれているものであって，最後に残されたものは抽象的な力（発話能力）だけなのである。

（2）超感性的世界

ここで我々科学者は，かの共通なものに残っているものを観察してみる。

(訳12)　***感覚器官の全体的形成***　初めに労働，続いて発話が発生してからはその労働とともに発話[36]――これら二つのものこそが最終決定の[37]推進力であって，サルのごときものの脳がそれらに促されこれと極めて似てはいるがそれよりずっと大きく，もっと完全なヒトの脳に次第に移行していった。それから脳に最も近い道具たる感覚器官が，脳の持続的な形成と相携え持続的に形成していった。発話のゆっくりした形成が既に，必然的にそれに対応した聴覚器官の鋭敏化を伴っていたように，脳一般の形成は感覚器官全体の形成を伴う。ワシはヒトよりずっと遠方を見ることができるが，ヒトの目は事物の中にワシの目よりずっと多くのことを見分けられる。イヌはヒトよりずっと敏感な鼻を持っているが，ヒトにとってはいろいろ違った事物を区別する元となる臭いを，百分の一も嗅ぎ分けることができない。また，触覚はと言えばサルにはごく粗略なその兆しさえほとんど現出し[38]ていないのであって，これは労働を通したヒトの手そのものによって初めて形成されたものだったのである。〈S.447-8.〉

論理的整理【現出存在】

①　するとかの共通なものに残っているもの（脳）は，もはや幻のような同一状態でしかなく，力（労働と発話）がその外化形式とは無関係に対象化されている（移行していった）ゼリーのようなものでしかない。

②　それから共通なもの（感覚器官全体）はもはや，抽象的な力（労働と発話）が支出堆積（持続的に形成）されているということしか現示していない。

③　かくしてそれら共通なもの（脳と感覚器官全体）は，それらいずれにも通ずる実体（労働）が結晶しているものとして現出存在（初めて形成されたもの）なのである。

（3）逆転した世界

我々科学者は，その抽象的な力が無限に形成してゆくことに注目する。

(訳13)　***労働と発話の発達***　脳とこれに奉仕する諸々の感覚器官の発達，そして益々明晰さを増してゆく意識の発達，すなわち抽象力と推理力の発達は，労働と発話とに反作用を及ぼし，これら両者を絶えず新たに刺激しさらに形成させていった。労働と発話とのさらなる形成といったようなことは[39]，ヒトがサルから最終的に分かれ切ってしまうや否や終わってしまうようなことではなく，その後も部族や時代によってその形成の程度や方向は様々に異なり，時には局地的，一時的に後退し中断されることさえあったが全体的には長足の進歩を続けた。そして，その形成を一方で強力に推し進め他方で一層特定された方向に推進していったのは，すっかり出来上がったヒト[40]の登場とともに新たに加わった一要素――***かの利益社会***[41]なのである[42]。〈S.448.〉

論理的整理【無限性】

①　かの科学対象そのもの（ヒト化）の中で現出存在（脳と感覚器官全体）は，我々科学者には対他存在（動物的進化）とは全く関係ないものに思われ，これを研究者が実際に度外視してみると，研究者はたった今

規定されたごとき現出存在を得ることになる。

② これは発達すると逆転して，抽象的な力（労働と発話）に作用する力となり，両契機は相互に作用し合う。

③ 我々科学者から見れば，その抽象的な力の形成は無限にちかく継続（全体的には長足の進歩を）するが，やはりそれはこの草稿では悪無限（完成したヒトの利益社会という新要素による推進）とは無関係に，したがって科学対象（ヒトへの身体進化）の内在的限界内で観察されなければならないのである。

注

序　文

1） エンゲルス 1885「反デューリング論・三つの版の序文」，マルクス・エンゲルス全集，第20巻，大月書店，14（原）ページ。

2） 外面的弁証法を知ることで満足するというのであれば，ヘーゲル『小論理学』第79節－第83節，を読むのが最適。なおこの部分は拙訳「ヘーゲル弁証法の特徴」，『立命館産業社会論集』，第28巻，第３号，1993年，123-42ページ，が読み易い。ただし，ヘーゲルその人が示唆しているように本当の弁証法を学ぶのであれば，その著書を最初から順次的に読み通す必要がある。

3） レーニン 1915「ヘーゲル弁証法（論理学）のプラン」，『哲学ノート』，全集，第38巻，大月書店，288ページ。

4） 牧野紀之「ヘーゲルとマルクスの登り方」，『初版資本論の付録』，（鶏鳴出版，1974年），24-５ページ。

5） 牧野紀之『労働と社会』，（鶏鳴出版，1972年），15-42ページ。

6） これに関しては牧野紀之訳『対訳経済学批判の序言』，（鶏鳴出版，1975年）で学習することを薦める。形式を読もうとしているからである。拙稿「いわゆる『社会構成体』概念について」，『立命館産業社会論集』，第24号，1980，47-106ページ，および「私的所有の二要因」，『同誌』，第26号，1980，139-58ページも割りと役に立つであろう。ただし拙稿のうち前者に関して言えば，全面的な書き直しが迫られるほど，訂正や補足を施さねばならないことが多々あるが，それでも旧来の定説に対する問題指摘は今日でも大きな意義を持っていると考える。

7） 牧野紀之『ヘーゲルと共に』，（鶏鳴出版，1982年），135-45ページ。

8） ヘーゲル『精神現象学』，上巻，牧野紀之訳，（鶏鳴出版，1987年）。ヘーゲル『小論理学』，牧野紀之訳，全５巻，（鶏鳴出版，1978-95年）。『精神現象学』牧野訳は「自己意識」までしか出版されていないので，「理性」以下は金子武蔵氏の訳を読めばよいと思う。

9） 拙稿「唯物史観－弁証法的唯物（１）－」，『立命館産業社会論集』，第23巻，第１号，1987年，131ページ。

10） ヘーゲル『小論理学』，第215節。

Ⅰ

1） 存在‐無‐生成という論理的カテゴリーの配列に配慮した。「労働」を冒頭においた原文に即している従来の訳，労働‐富‐源泉という配列では労働が存在というカテゴリーに読み取れ，これではそのパラグラフの展開からして生産物が定存在だということになる。もっとも存在＝無であり，定存在となるはずの生産物は労働を含んでいるのであるから，どのように表現しても内容上は問題なさそうに思え，エンゲルスもこのことを承知したうえで，恐らく「労働」をクローズアップさせるためそれを冒頭においたのであろう。しかし初学者に，論述形式を分かりやすく示すには拙訳が適切だと考える。

何事につけても最初には困難が伴うと言われ，「この商品」こそが『資本論』における定存在，すなわち端緒となるのだが，レーニンでさえもが商品を経済学における「存在」に相当する〔レーニン，289ページ〕といった曖昧さを記しているほどであるから，端緒発見に関するヘーゲル自身の簡単かつ易しい説明を，念のためこ

こに引用しておくのも強ち無駄ではあるまい。ヘーゲルは言う。

「そもそも存在というものは単純な，内容の無い無媒介状態で，この結果それの対立物は純粋な無であり，両者の統一は生成状態である。無から存在への移行は発生状態であって，……かの定存在は生成した，したがって規定された存在，一種の存在であり，同時に他者へ連関しているのであって，かくして自己の非存在へ連関しているのである」〔Hegel, G. W. F. *Nürnberger und Heidelberger Shchriften 1808-1817*. Suhrkamp, 1975, SS.166-７. 武市健人訳『哲学入門』，（岩波文庫，1952年），161-２ページ〕。

これでも端緒発見の論理が分からない者は，拙稿「絶望の淵から光明を見出す」，『立命館産業社会論集』，第24巻，第３号，1988年，25-９ページを参照せよ。

冒頭の「労働」と「富」に純粋理念の定冠詞〔関口存男『冠詞』第１巻，定冠詞篇，（三修社，1960年），442ページ〕がついている。

2）　「その労働」が感性的個別であることを訳出した。

3）　生物学ではMenschを「ヒト」と訳す。エンゲルスのこの草稿は，サルからヒトへの身体進化を扱っているのでその訳語を使用した。

4）　ここで用いられているmüssenは科学者の感性的確信，すなわち「思い込み」を表現している。これまでは必然か強制のニュアンスに訳してきたが，「言わなければならない」か否かは科学対象の証明が完了してから判定し得ることである。

5）　ヒトニザルから「ヒト化」を，すなわち類人猿から説き明かすのは現生人類から追思考すればそれが手作業の胚芽状態を見せているからであり，論理とは胚芽から二分化を経て現実性へと展開せざるを得ないものだからである〔ヘーゲル『小論理学』，第83節，付録，参照〕。しかし，こんなことにさえ注を付さねばならないとは何とも情けなくなってくる。エンゲルスよ彼らを許し給え，彼らは自分のなしている所を知らざればなり。

6）　現在の研究水準から言えばヒトニザルが，第三紀と地質学者たちが命名している地質時代の終わり頃，500万年以上前，大地溝帯以東のアフリカに，特殊に高度な進化を遂げた一種が棲んでいたと一般化される。古代ギリシア以来のアトランテス伝説を引きずったようなヘッケルの妄想や，当時の推測だけに頼るエンゲルス説とは決定的に異なって，ヒトニザルからのヒト科の分岐が900～500万年前のアフリカ大地溝帯以東で見られたとする現代研究の成果は，多くの化石証拠や遺伝子研究や地球環境変化の研究などの総合を基にしていて，論理的に見ても今後もそう簡単には揺るがない，と言うよりほぼ確定的である。異説が唱えられもしようが，多分それは小賢しい立ち回りにしかすぎない。

さしあたり，瀬戸口烈司『「人類の起源」大論争』，（講談社，1995年），第５章，およびY・コパン「イーストサイド物語――人類の故郷を求めて」諏訪元訳，『日経サイエンス』，第24巻，７号，（日経サイエンス社，1994年），92-100ページ，でも参照すればよいだろう。

7）　個別差の含みを表す不定冠詞。なお不定冠詞の基本的な意味諸形態に関しては，関口存男『冠詞』第２巻，不定冠詞篇，（三修社，1961年），10ページ以下。

8）　in Rudeln を，普遍性を表せるようにあえて俗語訳〔現代独和辞典，三修社〕を利用した。

9）　この文章では関口ドイツ語文法でいう「扮役的直接法」，他人の言ったこと，ここではダーウィン『人間の由来』第１部第６章の一パラグラフを，あたかも我がものであるかのごとくに表現する形式が用いられている。

10）　この生活様式は，四本脚それぞれを右前→右後ろ→左前→左後ろの順で動かす木登り垂直攀縁動作のことである。

11）　私見からすればこのパラグラフにおける，手足をバラバラに動かす木登り垂直攀縁動作への着目と，直立二足歩行がヒト化における第一の決定的に重要な一歩だとする明言は，エンゲルス独自の卓越した見解であった。第二，第三の重要点に関しては後述の注37）を参照。

なぜ，木登り垂直攀縁動作を直立二足歩行の前に指摘するのか。

垂直攀縁動作が前提となって，これが500万年前頃からの直立二足歩行に必要な身体構造を整えたからである。四足歩行のニホンザルを見事に二足歩行させる周防猿まわしの会では，歩行訓練を施す前に背筋を延ばす起立姿勢を充分トレーニングする。

知覚に対する我々科学者の観察は，ヘーゲル『精神現象学』のうちでも極めて難解な箇所の一つとして知られているが，平易な解説として，拙稿「阪神タイガースの選手像」，『鶏鳴』，第73号，(鶏鳴出版，1986年)，13-４ページ，を揚げておく。

12） und はヘーゲル知覚論の「肯定的に普遍的な媒質」を表している。

13） ナックルウォーキングを指摘している。

14） 「緊急策」に評辞の不定冠詞〔関口存男，不定冠詞篇，319ページ〕がついている。

15） 直立二足歩行に関する説明を，手の自由に先行させるのはなぜか。

直立二足歩行で手が自由になるということは手作業の必要な前提であるように思えるが，手作業は直立二足歩行にとって無関係な規定だと思えるからである。それゆえ，直立二足歩行についての説明を先行させせざるを得ない。それに現実的にも，四足歩行を基本的な移動様式にしているサルどもはヒトと根本的に違っていて，チンパンジー属といえども手が塞がっている時にしか二足歩行せず，二足歩行することによって手を自由に使用するのではない。ヒトの遥か遠い祖先は常時的な垂直攀縁動作に高度に適応し，チンパンジー属と別れ始めた頃から以降，腰の構造や脚の長さなどの違いによって，変形ブラキエーションに条件づけられている現生チンパンジー属の二足歩行よりずっと直立二足歩行に近く，したがって前肢もかなり自由だっただろうと推測される。エンゲルスが指摘するようにサルより下等な哺乳動物，例えばリスも前肢を使用するが四足歩行のままである。だから，O･ラヴジョイが言うような手の使用がヒトの祖先に直立二足歩行を発生させた〔Lovejoy, C. O. ‘ The Origin of Man ’, *Science 4481,* 1981, pp.341-50〕とする色欲的歓喜説は，現実的にも論理的にも成り立たないのである。

16） ここでのsollteは「運命・予定」のニュアンス。

17） エンゲルスは二足歩行を①サルにおける緊急策，②時々は木登り垂直攀縁動作をする原則的な段階，③いつでもどこでも行う必然的な段階，という三段階に分けているが，ヒト化への決定的な飛躍はどの段階だと見ていたのだろうか。

サルでは二足歩行が常態化されていない，と言っているわけであるから②のアウストラロピエクスにおける原則的な段階への飛躍が「決定的な一歩」であった。変化を対象とする場合には区画基準を自覚し，変化段階区分を明確に捉えなければ漸進的変化＝飛躍せず，ということになってしまう。これは量質転換で，量的変化が質的変化を引き起こす結節点を明確にしておかなければ科学にならないのと同様である。

なお，直立二足歩行が必然的な段階へ移ったのは180万年前のホモ・エレクトゥスからである。

この直後にmehr und mehrという熟語が用いられているが，②から③の「その間に益々」なのであって，エンゲルスほどになると空虚な修飾は行わない。実際，この間に石器製作が行われるようになるのである。

18） サルはたとえチンパンジーでも，親指の筋肉分化が貧弱だったりなどで，物を指先で「摘み取る」ことはできない。

19） チンパンジーには，アンダーハンドで物を放り出すことしかできない。

20） 今日の学界では，ヒトの祖先が石器製作というヒトに特徴的な労働を開始したのは，250-300万年前からだとされている。

21） チンパンジーは蟻釣りの釣り竿や，水飲み用に葉っぱのスポンジを作るが，チンパンジーにおける道具製作と，ヒトの祖先における石器製作との決定的な違いは何か。

チンパンジーでの蟻釣り用釣竿や葉っぱのスポンジは，道具の継続的で無限な発展の抽象的可能性を開いたとはいえ一，二回の使用にしか耐えられず道具の継続的改良には程遠い。高々数回使って役に立たなくなる道具では，同じよ

うなものをまた最初から作り出さなければならず，到底道具の改良には至らない。意識性はいまだ動物に属するような形での本能的な形式，あるいは条件反射にしか基づいていないものである。

しかし拇指対向性の発達という有利さ，指の優れたマニュピレーションに恵まれ，またサヴァナという生活地盤や肉体的ハンディキャップに迫られ，その中で作り始めたのであろう骨歯角器であれば，それは同一の道具の恒常的使用をもたらし道具の改良を考えさせる時間を保証する。この段階では合目的性が，最初期におけるヒトの本能的な形式から抜け出し始めていること，このことは明白。

石器となれば，それは同一の道具による天文学的な回数での反復使用に耐え，自然支配に適う目的意識を発生させる永続性を，ヒト化しつつあった種に獲得させてゆくことになる。この点をヘーゲルは，目的と道具が対立している意識の発達段階においては，目的の中にある理性的性格は道具という物体に付随して現れてくるのであって，自然支配という最終目的の成就には手段の保存性が絶対不可欠だ〔Hegel, G. W. F. (1816) *Wissenschaft der Logik. II*. Suhrkamp, 1976, S.453.『大論理学』下巻，武市健人訳，（岩波書店，1975年），244-５ページ〕と述べていたのである。

22）　なぜ手の自由に関する説明を，石器製作に先行させるのか。

手が自由になるということは，石器製作の必要な前提であるように思えるが，石器製作は手の自由にとって無関係な規定だと思える。それゆえ，手の自由についての説明を先行させざるを得ない。それに現実的にも，直立二足歩行をしていたヒトの最初の先祖アウストラロピテクス類は500万年前頃に発生してから以降，少なくとも200万年間は石器を作れなかったのである。

23）　研究の現状から言えば「我々の祖先は，前肢を初めて分立的に使い始めたケニアピテクス属段階以来の1,500万年間を通して」ということになる。

24）　原文ではmehr。

25）　geschichtliche Zeitは科学的な意味での「歴史」ではなく，書き記された時代という意味である。

26）　このdamitのdaを牧野紀之氏の意見〔牧野紀之『マルクスの読書会』①，（鶏鳴出版，1975年），37ページ〕に同意して，新技能を獲得したことと受け取った。

27）　vererbenは伊藤嘉昭氏の訳語〔伊藤嘉昭『サルが人間になるにあたっての労働の役割』，（青木書店，1967年），60ページ〕にならって訳した。現代遺伝学で，獲得形質が遺伝することはないと結論づけられてから久しいからである。

だが種レベルで，何百万年も費やしたヒトへの進化に関して，遺伝子のランダムな突然変異と自然選択だけで全てが説明し尽くされるかは疑問。相互作用に基づくのが世の常なれば，行動変化が蛋白性機能分子群に影響を与え，ひいては遺伝子を変異させる逆の可能性もあると思えるのだが……。もっとも自然選択と行動変化との相互作用を認めたうえで，遺伝子の変異が生物進化の究極的な推進力だと言うなら納得がいく。1991年以降本格化したアメリカの「新世界秩序」戦略を，生物界に移入したと思えるS・カウフマンの「カオスの辺縁」説の深化がこの問題に答えてくれるのだろうか。あるいは，W・ゲーリングを中心とする発生生物学におけるホメオボックスの研究が，これも今迄のところ伝統的な進化論に立ってはいるが，将来的にはこの問題に具体的な答えを出してくれるのだろうか。

28）　獲得形質は遺伝しないとされているので，このAnpassungを「適応」と訳すことはできない。

29）　alleinはヒトに独自な「労働の産物」という側面だけと言っていて，ここは「対自存在」，言い換えれば「それだけでの在り方」とか「独立している在り方」を意味している。

30）　手の自然的側面を表していて「対他存在」を意味している。

31）　成長の相関法則を最初に指摘したのは，G・L・キュヴィエであった。

32）　事実を事実として挙げ連ねただけで，「その連

関を説明すること」ができなければ科学ではないと言っている。

このパラグラフは今日では誤りとされている実例が紹介されているので，確かだとされる事例をエンゲルスの論述に沿って〔　〕内に示しておく。

第一の側面は，ダーウィン〔も〕言っていた成長の相関法則の結果である。この法則によると生物有機体の部分一つひとつが有する或る形は常に，一見それとは何の連関もないかのように思えてしまう他の部分が持つ或る形と結び付いているという。だから〔……〕，後頭部が二つの関節（関節丘）で第一脊椎と結合している動物は全てが，例外なしに幼獣に哺乳するための乳腺を持っている。それなのに〔この連関は，たんなる偶然なのかもしれない。深海に適応した魚の多くは目が退化している。ウマがスピードアップの進化に向け頭骨の長さが2.5倍に伸びた間に，幅が２倍にしか広がらなかったような相対的成長も，またヒトの先祖において汗腺分布から体毛が減少したような体物質補償もその例の一つ〕。我々にはその連関を説明することはできないが，或る形が変化すると他の身体部分の形が変化する。〔ヒト以外の哺乳動物は，その内臓運動神経核に制限され小鳥のように囀ることができない〕。ヒトの手が次第に器用になってゆき，……

33）　ここでの定冠詞を通り言葉の定冠詞〔関口存男，定冠詞篇，520ページ〕と解釈した。「いわゆる利益社会的成員」とは，一般に言われている経済的人格諸関係の総和のようなものを成すヒトビトという意味である。なお，Gesellschaftに関しては後述の注41）を参照。

34）　artikulierten Buchstabeに特殊化規定の不定冠詞〔関口存男，不定冠詞篇，320ページ〕がついていて，後出の「分節言語」への布石となっている。

35）　このSpracheはこれまで「言語」と訳されてきたが，身振り言語とかゲラダヒヒの鳴き声言語などという術語が使用されたり，R・ダンンバーによって言語の起源はチンパンジーの毛づくろいに由来する〔Dunbar, R. *Grooming, Gossip and the Evolution of Language.* Father and Father, 1996, pp.77-９〕といった主張がなされたりするので，エンゲルスの「分節言語によるコミュニケーション活動」という真意を表すには「発話」と訳出するのが適切だと考える。

なお，ヒトビトが生活をスムーズに営むには分節言語の方が，自然に無媒介に制約されている毛づくろいなどよりずっと効率の良いメディアであり，その言語は生活経験を共有してきている集団の了解下で作られ組合わされた記号ノリモノであることは言うまでもないが，さらにその記号が幼稚な擬声語にも既に窺えるように無媒介な姿では妥当せず，意味すべきものとしての自由な妥当性を有するがゆえに，コミュニケーションの無限的な向上可能性を獲得してゆける質的側面をも持っているのである。

36）　──で並んでいるのはnach ihrと(dann) mit ihrだろうとする牧野紀之氏の推定〔前掲書，1975年，43ページ〕を取り入れた。労働の発生に関する説明を発話の発生に先行させているのは，ヒトの特徴が労働にあり，これが自然認識と協働を増強させ諸個体間コミュニケーションの欲求を高めたからである。発話も労働に含まれることは言うまでもないが，事実経過を事実として指摘するだけでなく，何が根本前提に位置するかを確定することが科学の基本的な一作業なのである。

37）　ヒト化における決定的な一歩は第一に直立二足歩行であった。第二に手の自由で，最後に労働とこれに続く発話の発生とである。なお，wesentlichの最上級は在り方論に相当するここでは「最も本質的な」と訳すことはできない。にもかかわらずエンゲルスがその単語をここで用いたのは，次に展開する本質論を予告するためである。

38）　existierenはラテン語のexistereを語源とする動詞で，根拠と条件から媒介されての生成を意味している。その根拠が現れ出た在り方は「現出存在」と呼ばれる。これまで感性的個別は何かと問い続けてきたわけだが，悟性はそれを普遍的な力だと捉え，力は何かと問われると今度は現出存在として生成するものだと説明する。

だからヘーゲルはそのことを「トートロジー的運動」呼び，これが悟性の説明原理だというのである。

なおエンゲルスはこの現出存在を，ヘーゲル『精神現象学』の流れに沿ってここ在り方論中，質的諸規定の後尾に位置づけているが，ヘーゲル自身は彼の論理学の中でそれを本質論に組み入れていた。

39）　質の含みという基本的な意味形態の不定冠詞がついている。

40）　約20万年前に出現した現代型ホモ・サピエンス，現生人類の直接的な先祖のことである。

41）　かねてから本稿制作者が指摘してきたことであるが，マルクスとエンゲルスとが使っているGesellschaftは「経済的人格諸関係の総和」を表現していて，日本語の「人格的諸関係の総和」といった曖昧模糊とした「社会一般」を表しているわけではない。もしその用語がこの意味だとすれば，これから論証し切ろうとする科学対象を取り上げ，この終局となるべきものを前提して端緒を発見しようとする『資本論』の起筆の一句，「資本家流の生産様式が支配しているGesellschaften」はいわゆる資本主義社会全般を表すことになり，その著書は資本主義体制下における政治的諸関係，法的諸関係，精神的諸関係等々，そこでの人格的諸関係一切を論理的に記述せざるを得なくなってしまうではないか。彼らの見解は，ヘーゲルの「市民社会＝経済社会」説を積極的かつ批判的に継承したものなのである。

42）　以上でヒト化に関する在り方論が終わっているが，エンゲルスが展開したのは質的規定についてだけであって，量的規定に関しては展開していないのである。

Immanent Dialectic in ‘ The Part Played by Labour in the Transition from Ape to Man ’. (1)

Yasuhide SUDO＊

Abstract: For the first time in the history of research, my study will dialectically show in a practical sense the immanent, historical, and total dialectic in ‘ The Part Played by Labour in the Transition from Ape to Man ’, one of the most useful works in mastering the art of working with concepts of a scientific subject matter. In his manuscript, Engels logically examined isolated results of the study on the transition from ape to man, and explicated the total evolution ── the origin, existence, development, death ── of man. This note of my research here corresponds to the consciousness in general or being in the dialectical categories, and is divided into three parts: ① the sensuous certainty or being, ② the perception or the determinate-being, and ③ the understanding or the for-itself-being.

Engels insisted that the above were qualitative determinations of the hominization, but didn't touch on the quantitative determinations of it in his manuscript.

key words: sensuous certainty. tree-climbing. perception. bipedalism. free use of hands. stone tool. understanding. speech. brain. sense organ.

＊Professor of the Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University